

セタジミD型仔貝の増産をめざした採卵槽の改良

井戸本 純一

◆背景・目的

放流用D型仔貝の生産量は、おもに採卵孵化に用いるFRP水槽の底面積の総和によって制限されている。施設を拡大することなく放流種苗の増産をはかるには、採卵槽1台1回あたりの卵収容量を増やすことが必要であることから、簡易な改良で卵を立体的に収容する方法を検討した。

◆成果の内容・特徴

- 線径約1.5mmのポリプロピレンの線条を立体網状に成型したマット（厚さ10cm）を採卵槽の底面に敷設し、卵が弱い粘着性を有することを利用して立体的に収容することを試みた。
- 通気による水の循環が異なる改良型AおよびBと従来型の採卵槽を使って、親貝各1.5kgから採卵し、D型仔貝の生産量を比較した。
- 改良型Aでは、卵583万粒からD型仔貝480万個体（82.4%）が生産でき、従来型（卵1,137万粒からD型仔貝467万個体）よりも生残率が高かった。
- 改良型Bでは、水流の関係から産卵量の把握ができなかったが、同じ量の親貝から727万個体のD型仔貝が生産できた。

◆成果の活用・留意点

- 今回は親貝の使用量を従来型に合わせたため、採卵槽1台あたりの増産の可否を確認することはできなかったが、生残率の向上効果は認められた。
- 産卵量を把握する方法や親貝の適正使用量、最適な水の循環方法などについて、さらに検討を加える必要がある。

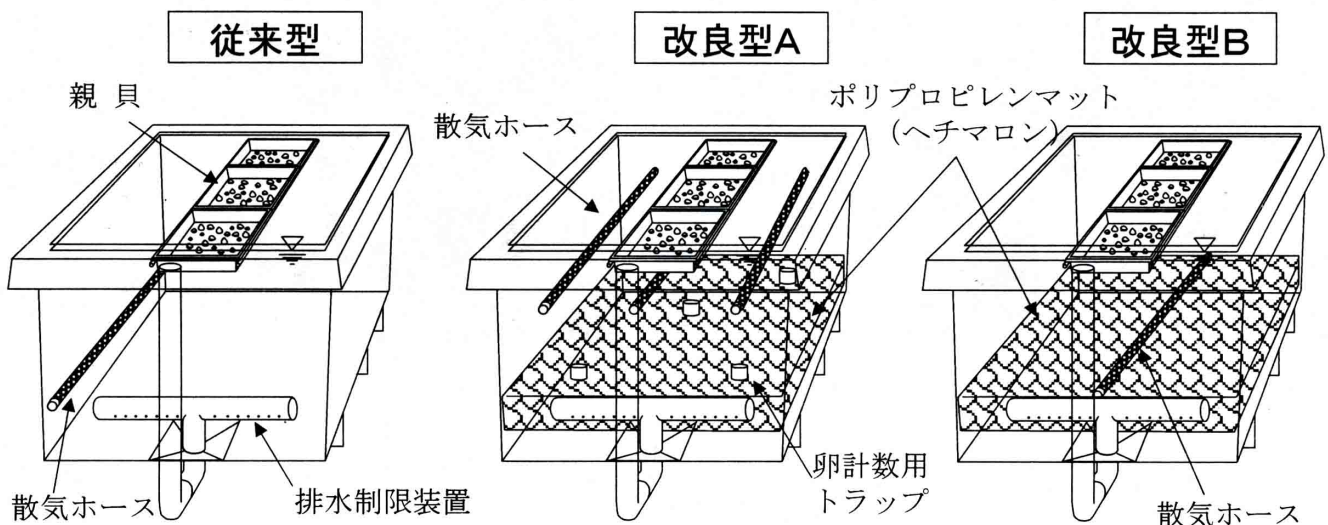


図 セタジミ採卵槽の従来型と改良型AおよびB